



<中庭に提琴響く若葉風> 哲風

北からの乾いた風が心地よい初夏の晴天が続いています。

今日6月5日は「環境の日（世界環境デー）」です。45年前の1972年6月5日、ストックホルムで地球環境問題を議論する初めての国際会議「国連人間環境会議」が開催されたのを記念して、日本とセネガルの共同提案により定められたとのことです。1972年といえば、私が大学院（修士課程）に進学した年で、これから何をやろうかと思案していた頃ですが、人間活動が地球規模の環境に大きく影響する可能性を国連が初めて指摘したことに、何か新しい時代の到来を予感したように記憶しています。

ところで、6月5日は、二十四節気の「芒種」にあたります。芒種の意味は、芒（のぎ）を持つ植物の種を撒く頃、すなわち、稲を植える田植えの時期を意味しています。地球研の近くの田んぼでも、田植えが始まっています。今日は東京出張で新幹線の車窓からも、田植えの風景が続いていました。東海道新幹線沿いでも、地域ごとに田植え時期が微妙に違うこともわかります。日本列島の最近の田植え時期は、「芒種」よりかなり早くなっているようです。低温にも強い改良品種などのせいもありますが、近年の気候変動（温暖化）の影響も大きいようです。

筑波大学の林陽生氏（農業気象学）によれば、CO₂が増えれば、植物の光合成が進み稲の生育が促進されることや、気温の上昇による生長速度の促進などの「正の効果」もある一方で、気温の上昇により、高温によるいくつかの生育障害が生じるという「負の効果」もあることを指摘しています（林, 2009）。気温上昇による害虫の増加などの影響も考慮せねばなりません。温暖化が農産物に与える影響と一言でいっても複雑な要因が絡むことがわかります。林氏らは、このまま温暖化が進行すれば、2060年頃には、東北や北海道の一部で稲の収量は増加するが、西日本から東日本の大部分の地域では稲の収量は生育障害によりむしろ減少すると推定しています。地球温暖化が、東アジアの梅雨活動や夏の天候をどう変化させるか、まだまだ正確な予測には至っていませんが、最近の高解像度の気候モデルによる予測は、北日本の冷害をもたらす“やませ”（三陸沿岸に吹く冷たい北風）の頻度は、むしろ増加するという結果も出しています（Endo, 2012）。

折しも、米国のトランプ大統領は地球温暖化を世界各国で協力して抑制しようとする「パリ条約」からの脱退を宣言しました。トランプ氏への批判は多々ありますが、氏の農業への無関心は特に大きな問題です。

<北風か南風（はえ）か気になる芒種かな> 哲風

参考文献：

林 陽生, 2009: /地球温暖化で日本農業はどう変わる/. 家の光協会, 205 pp.

Endo, H., 2012: Future Changes of Yamase Bringing Unusually Cold Summers over Northeastern Japan in CMIP3 Multi-Models. J. Meteorol. Soc. Japan, 90A, 123-136.



写真：地球研前にある田植え直後の水田。2017年6月6日撮影。